

〔論文〕

幼児教育を学ぶ学生が「つくる活動」から素材を知る 授業実践の試み

古川 洋子

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

子どもを取り巻く環境は時代と共に変化しており、幼児教育をおこなう施設は保育を通して大きな役割を担っている。また、保育者は質の高い保育の実現をはかるため、知識や技術を身に付けることが求められている。幼稚園教育要領の領域「表現」[内容] (5)に「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」¹⁾とある。幼稚園教育要領解説では、「幼児がイメージを広げたり、そのイメージを表現したりできるような魅力ある素材が豊かにある環境を準備することが大切である。」²⁾と示している。幼児教育が目指す方向が示されている幼稚園教育要領を丁寧に読み解くことは重要である。本研究は、保育内容指導法(表現・造形)での授業実践の報告と、今後の授業のあり方について検討することを目的とする。

キーワード：素材, 造形, 表現, 実践, 幼稚園教育要領

An attempt to carry out a lesson in which students learning
early childhood education learn about materials from
“crafting activities”

Yoko FURUKAWA

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

1. はじめに

領域「表現」〔内容〕(5)に「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」³⁾とある。幼稚園教育要領解説では、「幼児がイメージを広げたり、そのイメージを表現したりできるような魅力ある素材が豊かにある環境を準備することが大切である。」⁴⁾と示している。さらに、領域「表現」〔内容の取扱い〕(3)に「生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲や十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。」⁵⁾とある。下線部分は、平成30年4月に施行された幼稚園教育要領に新たに示された。幼稚園教育要領解説では、「教師が様々な素材を用意したり、多様な表現の仕方に触れるように配慮したりして、幼児が十分に楽しみながら表現し親しむことで、他の素材や表現の仕方に新たな刺激を受けて、表現がより広がったりするようになることが考えられる。」⁶⁾と示している。

幼稚園には、家庭にはないたくさんの素材がある。大人からしてみると、これは使えないと思うものが、子どもにとっては魅力的な素材であったりする。そのため、教師は子どもたちがどんなことに興味があるか、使ったことのない素材は何かなど、子どもたちの今の状況を読み取ることが求められている。また、教師が子どもたちと一緒につくったり、つくったもので遊んだりして楽しむことは、子どもたちにとって刺激になり、更なる工夫が生まれるきっかけにもなる。

1回目の授業で、学生に「かいたり、つくったりすることは好きですか？」と尋ねた。多くの学生が「苦手」「嫌い」だと答える。理由は、「褒められたことが一度もない」「こうなさいと先生に言われることが苦痛だった」「作った物を友達と比較されるのが嫌だった」「真っ白な紙の、どの場所から書いていいのかわからなかった」「作品を展示されることが嫌だった」など、理由は様々である。「苦手」「嫌い」だと答える学生は、授業に対しても消極的な傾向がある。

かいたり、つくったりすることが、突然好きになることはないだろうが「つくる活動」通して、学生自身が身の回りに素材があることを知り、様々な素材があることは、より表現が広がる体験をし、面白さや楽しさを学生自身が感じて欲しい。

2. 「保育内容指導法（表現・造形）」における授業実践

2019年度の「保育内容指導法（表現・造形）」の授業は2年生23名が受講した。授業概要は、幼稚園教育要領に示された「表現」のねらい及び内容の理解を深めるとともに、基本的な指導方法の習得を目的としている。ここでは、15回の授業のうち4回おこなった「つくる活動」における学生の取り組みについて述べる。

(1) 4つの「つくる活動」

・新聞紙でファッションショー

ほとんどの学生は、「新聞紙でファッションショー」と聞いた瞬間、気が進まない表情になった。

前週、新聞紙以外に必要なと思う道具や素材をグループで話し合い、当日用意するように伝えた。学生が用意したものは、ハサミ、のり、ステープラー、マジック、ガムテープ、セロハンテープ、マスキングテープ、折り紙、色画用紙が多かった。1つのグループは、すずらんテープ、包装紙、花紙を用意していた。グループごとに自分たちが用意したものでつくり始めたが、用意したものでイメージしたものをつくりすることができないことに気づき、活動が中断するグループもある。筆者としては、この場面が学生には必要な体験だと考える。中断したグループには、あらかじめ筆者が準備した道具や素材を見せ、それを使って活動を続けるように促した。わずかな素材を使って、衣装をつくり身にまとっていた。

・秋を感じよう

本学のキャンパスは自然に恵まれた環境である。木の実や木の枝、葉っぱなど自然の素材が豊富にある。学生は、秋をイメージしたものをつくるためキャンパスを散策して素材を探す。葉っぱの色や形、木の枝の太さや長さにこだわる学生もいる。真剣に素材を探す学生が多く、散策に持って行った袋のなかには、たくさんの自然素材が入っていた。教室に戻り、みつけた素材を組み合わせながら形にしていく。道具は、グルーガンとボンドを準備した。素材は、フェルト、布、サテンリボン、麻紐、毛糸、画用紙、ダンボール、折り紙、紙皿を準備した。異素材を組み合わせ、思い思いの「秋」を表現した。画用紙で王冠をつくり葉っぱをボンドで接着したり、ハロウィンを意識したリースを木の枝でつくり、サテンリボンや折り紙でつくったかぼちゃを貼ったり、ダンボールを台紙にして、どんぐりや麻紐をグルーガンで接着しウエルカムボードをつくったりした。

・お弁当カップでクリスマスカード

「100均は保育の素材の宝庫」として2019年7月保育雑誌ポットでも取り上げられていたが100円ショップには様々な素材が数多くある。2019年度のクリスマスカードは、お弁当をつくる時に使う紙製のおかずカップを使った。おかずカップには、様々な形や色があるが丸い形のおかずカップを選び、クリスマスを意識して赤や緑のおかずカップを選んだ。おかずカップを半分に折った物を4枚作り、それを重ねたものを画用紙に貼る。折り紙を幹や星の形に切って貼ると、クリスマスツリーができる。前週、100円ショップで購入でき、使ったこと、見たことがあるものでクリスマスツリーをつくり、それを貼ってクリスマスカードをつくと学生に伝えた。当日、おかずカップでクリスマスツリーをつくることを伝えると、ほとんどの学生が意外そうな表情だった。実際につくり始めると、とても簡単につくりことができるため、生き生きとした学生の表情が印象的だった。今回は、友達や家族にプレゼントしたいと話す学生が多く、いつもにまして丁寧にカードにメッセージを書いたり、色を塗ったりして、クリスマスカードをつくっていた。

・素敵なかレンダー

来年の4月から8月まで筆者の研究室に飾るカレンダーをグループごとにつくった。台紙となる画用紙だけ用意して、あとは学生に任せた。日付の部分は、コピーしたものを貼るグループや、マジック

クで書くグループもあった。あいた場所には、季節を感じるものをつくったり、貼ったりしてカレンダーが出来上がった。素材にこだわることを伝えたわけではないが、授業で紹介した素材や技法を取り入れていた。4月は雑誌をちぎって桜のちぎり絵、5月は折り紙でこいのぼり、6月はお弁当カップでカタツムリ、7月は七夕をイメージした切り絵、8月はスクラッチ技法で花火のカレンダーが完成した。

(2) 4つの「つくる活動」からみえてきたこと

4つの「つくる活動」だけでは、「素材を知る」には無理があったが、学生の記述や取り組む姿勢に変化がみられた。

「新聞紙でファッションショー」では、新聞紙は手に入りやすく、気兼ねなく使うことができたり、簡単に破ったり折ったりすることができる。しかし、破れてほしくない時に破れ、何度もガムテープで補強することに時間がかかり、時間内に完成しなかったグループもあった。また、新聞紙は、色が限られているため、イメージするものの形にすることが難しかったようだ。そのため新聞紙以外の素材を用意すべきだったと記述にあった。また、カラーのビニール袋や不織布でつくりたいと学生から要望もあった。これらは、実際に新聞紙でつくったから気づけたことだと考える。

「秋を感じよう」では、自然の素材で表現することの面白さを感じた学生は、いくつも作品をつくった。普段、学生自身が体験できない活動だからか「楽しかった」「もっと作りたかった」「時間が足らなかった」と、記述した学生が多かった。画用紙に葉っぱをボンドで貼っていた学生が、葉っぱがボロボロにならない方法を調べていた。また、グルーガンで接着していた学生が使い方に苦戦し、安全面の配慮が必要だと気づいた学生もいた。なかには、ハサミで糸を切ることが難しいと感じた学生もいた。うまくいかなかった体験から、子どもの年齢にあった素材を用意することに気づいたようだ。

「お弁当カップでクリスマスカード」では、ほとんどの学生が、お弁当カップがツリーになるとは想像しなかったと記述していた。お弁当カップをツリーだけではなく、立体のクリスマスツリーをつくった学生もいた。どんなものでも子どもの造形活動において、素材になるのではないかと関心をもったようだ。のりで、お弁当カップを画用紙に貼ったが、しっかりのりをつけないとはがれたため、両面テープで貼ることを提案した学生もいた。指示通りではなく、アイデアが浮かぶと言葉に出すようになってきた。

「素敵なカレンダー」は、最後の「つくる活動」だ。筆者としては授業で学んだこと取り入れることができるカレンダーづくりを計画した。筆者が考えていたよりは、技法や素材の特性を活かしたカレンダーができた。「新聞紙でファッションショー」では、道具を借り素材を周りからわけてもらっていた学生が、カレンダーをつくる時は、道具や素材を用意して授業にのぞんでいた。筆者に頼ることなくカレンダーをつくることができると、学生の成長を感じることができた。

学生の周りにもたくさん素材があることを知って欲しく「つくる活動」を4回おこなった。4回だけでは学生に伝わらないことはわかってはいたが、活動する学生の姿や授業感想の記述内容、1回目、11回目の授業で「身近な素材」のイメージマップを学生に書かせた結果、11回目に書いたイメージマップが大きく広がっていたことから、「つくる活動」には意味があったと考える。また、欲しい

と思う道具や素材があることは表現する幅が広がる体験から、念入りな準備が必要だと気づいたようだ。しかし、活動の内容によっては、学生が楽しむだけでおわってしまった活動もある。このことから、実際に学生が「つくる活動」で体験したことを子どもと一緒に楽しむ造形活動として、どのように発展させるかが課題である。また、筆者がテーマを決めて「つくる活動」をおこなったが、学生がテーマを決め、学生に進行を任せることで、学生自身が、自ら「素材を知る」ことに繋がると考える。

3. おわりに

造形活動と聞くと、作品を完成させることが重要だと考える人も多いのではないだろうか。幼児期の造形活動においては、子どもが作品をつくる過程で考えたり、発見したり、挑戦したりすることが大切だとされている。そこには、教師が子どもの工夫を読み取って共感したり、子どもが夢中でつくっている時は見守ったり、時には子どもの求めに応えたり、教師も一緒につくったり、様々な教師の援助のもと造形活動がおこなわれている。教師の役割について、幼稚園教育要領解説では、「先生のようにやってみたいという幼児の思いが、事物との新たな出会いを生み出したり、工夫して遊びに取り組んだりすることを促す。教師の日々の言葉や行動する姿をモデルととして多くのことを学んでいく。」⁷⁾と示されている。このことから、かいたり、つくったりすることが「苦手」「嫌い」な学生の意識が変化するような授業を心がけたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 p. 239
- 2) 同上書 p. 239
- 3) 同上書 p. 239
- 4) 同上書 p. 239
- 5) 同上書 p. 239
- 6) 同上書 p. 246
- 7) 同上書 p. 117

参考文献

- 植英子 (2018) 『保育をひらく造形表現』萌文書林